

岷江入楚の「私」説

— 通勝説ではない「私」説 —

小 高 道 子

『源氏物語』 真木柱巻の巻名について岷江入楚は「花以歌為巻名秘」と記す。すなわち真木柱の巻名は、同巻にある贈答歌「今はとて宿かれぬとも馴きつるまきの柱は我を忘るな」「なれきとは思ひ出づとも何により立ちとまるべき真木の柱ぞ」によるとする花鳥余情の説を公衆説である「秘」も継承しているという。巻名がこの和歌によるものであれば、巻名は「真木の柱」となるはずである。この真木柱と真木の柱についてはすでに論じたが、他の部分の「私」説には通勝説ではない「私」説がみられる。本稿では岷江入楚の「私」説について再検討したい。

— 真木柱巻

真木柱巻の巻名について、花鳥余情が「以歌為巻名」と記し、古注の多くが継承していることは知られている。しかしながら岷江入楚に「花以歌為巻名秘」とあることから、三条西公条の聞書である「秘」も花鳥余情の「以歌為巻名」を継承していると推定できる。

まず岷江入楚の巻名についての注釈を検討してみよう。

真木柱 或槿柱 花以歌為巻名秘

河 巻名今はとて宿かれぬともなれきつるまきの柱は我を忘るな
聞 哥にはまきのはしらとあれとも巻名はまきばしら也

花鳥余情のいうように和歌をもとに巻名を付けたとすると巻名は「真木の柱」となるはずである。しかしながら、紹巴の聞書であることを示す「聞」とする注記には、「哥にはまきのはしらとあれとも巻名はまきばしら也」と、和歌には「真木の柱」とあるが巻名としては「まきばしら」であると記している。

この事を念頭に置いてこの部分の他の注釈書を検討すると、大半が花鳥余情を継承して「以歌為巻名」としているが、孟津抄と紹巴抄は和歌には「真木の柱」とあることを指摘している。また、源氏物語提要のみ、「歌にはまきの柱よと有、詞に、かのまき柱と有故に詞をとるへし」として和歌によらずに詞によって巻名を付けたと記している。

この源氏物語提要については稲賀敬二氏が解説されている。稲賀氏は源氏物語提要に他の注釈書と一致する記事があることについて「共通のもとになった注釈書の存在」を想定された。だが、真木柱の巻名を「詞をとる」とする解釈は、岷江入楚が継承する他の古注には見られない。「共通のもとになった注釈書」ではなく別系統の注であると判断すべきであろう。同じ公条の講釈を聴いても門弟によって聞書の内容が異なることはあるが、師資相承については慎重に検討する必要があるだろう。

一 岷江入楚桐壺巻冒頭注記

岷江入楚桐壺巻のはじめには、序文の他、源氏物語についての概説が記されている。その中に「巻々之名事」として、巻名について記した部分がある。ここでは花鳥余情に従って「巻の名に四の意あり」には詞をとり二には哥をとり三には詞と哥との二つをとる 四には哥にも詞にもなき事を名とせり」と記した後、「一或全取則或尽或余」として「真木柱」をあげ、「哥にはまきの柱とあり 詞にまき柱とあり」と記している。この注記は三条西家の源氏学を継承した中院通勝が、岷江入楚の本文を記す前提として冒頭に記したものであるから、三条西家の解釈と推定できる。三条西家では、花鳥余情のいう「以歌為巻名」に加えて、和歌によれば「真木の柱」であり、「真木柱」は詞にあることを把握した上で、花鳥余情の「以歌為巻名」とする解釈を引用していたのである。

道統を重視する三条西家の源氏学において、道統が明らかでない周

辺の注釈書を取り込むことは想定しにくい。岷江入楚について考察する際には、本文の注釈のみならず、桐壺巻冒頭に記された注記もあわせて検討することにより、三条西家の源氏学を理解することが必要であろう。

三 花宴巻の「私」説

岷江入楚には、「私云」などとして、通勝の私説であることを記した注記が見られる。これらの注記について稲賀敬二氏は源氏物語提要との「共通のもとになった注釈書」の注釈を継承したことを想定された。三条西家の古典学を継承し、その道統を示しつつ岷江入楚をまとめた通勝が参照した、三条西家の説とは異なる説を含む「共通のもとになった注釈書」とは、どのような道統で通勝に継承されたのであるうか。

岷江入楚の「此抄引処ノ肩付」において、通勝は「私」について次のごとく記している

此内私卜書之者予今案之義也

諸抄に相違有テ其外二今案ヲ註付ル分ヲ私卜註之了

私と記すのは、「予今案之義」か、「諸抄に相違有テ其外二今案ヲ註付ル分」すなわちいずれにしても通勝自身が「今案」じたことである。このことにもとづいて真木柱巻の「私」を検討したところ、諸抄の相違について通勝の「私」説を記したことが多かった。その一方で、語

義語釈・故実ではなく、本文には記されていない行間の解釈を記した記述も見られた。そして解釈について「猶案へし」などと、自分の疑問点を記すこともあった。

この「私」説について検討すると、花宴巻の「私」説に、通勝の私説とは推定できない記述が見られることに気づく。岷江入楚花宴¹⁴⁹・¹⁸⁷注に次のことくある。

外の散りなむとやをしへられたりけん(149)

花 古今哥に外の散りなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれば哥の詞になき事をも心をとりにかくのことくかける也 定家卿の哥はおほくは此物語より出たりとみえ侍り いこま山いさむる花にみる雲のうきて思ひのたゆる日もなし とよめるは本哥の雲なかくしそといへるは雲をいさめたる心なればやかに心をとりにいさむる花とよみ侍る也 こゝの詞に相似たるやうなればよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也 大かた源氏などを一見するは哥などによまむ為也 よまむにとりては本哥本説を用へきやうをしらすしてはいかゝと思ひ給へ侍れはいとときなき人の為にしるしつけ侍る也

箋曰 みる人もなき山里の桜はな外の散りなむ後そさかまし 後そさかましといふは花にいひ教たると云義にてをさへて書也 定家卿い駒山いさむる峯にー雲なかくしそと云はいさめたる心なれば如此用る也 此哥の取やう外のちりなんの引哥を手本と取やう也 已上花 已上箋

秘 面白き書様也 古今の本哥に後そさかましとをしへたるをもて書たる詞也 花鳥にみえたり 弄同

私云 此取やう尤絶(妙の事とそ 心を付へし)(異同有り)

『古今和歌集』の和歌に「外の散りなん後そさかまし」とある和歌を、和歌の詞ではなく心をとって「外の散りなむとやをしへられたりけん」と記したのが「面白き書様」であるとする「秘」を受けて、「私云 此取やう尤絶(妙の事とそ 心を付へし)(異同有り)」と記している。秘説を継承した部分ではあるが、「私云」としながらも、内容は通勝自身の私説というよりはむしろ、師匠からの聞書と推定される。通勝は公条・実枝の講釈を聴いて、三条西家の源氏学を継承したが、公条・実枝の講釈の中でも、三条西家の説を補足したり、言い換えたりして説明された部分については、公的な三条西家の説である「秘」「箋」とはせずに、「私」説として記したのである。同様のことは¹⁸⁷の注にも見られる。

ことうれしき物から(187)

花 草の原をはとはしとや思ふといひし其人の声とは聞きなせりうれしきものからの結語おもしろく書なせり かつくうれしくはあれともいまた六の君とはたしかにしらぬ心をふくませたり 箋曰 花に草の原の君そと凡は聞なしたれとも六君にや又もし別人にやたしかに知給はぬ心云々 花説さも有ぬへし 此結語誠に物語の眼也 源氏の心にあくかれて有明の行衛を尋知たき心なれば此時其人とたしかに知ぬるは本意のうへの本望也 されとも女

の身にて人にこそよれかるくしき事やと心に浅く思給よし也
源氏の性万事においてかくのこし 眼を付へし

秘 花鳥説面白し 但師説此結語は返哥をし給事はうれしくはあれとも女の身にとりてはちとかるくしとおほしたる也 是源氏の姓也 いつくにも此心あり

弄 尋あひたるはうれしけれとも女の返事すへき事のさまは然へからすと思ひ給心あれば物からといひのこしたり 是又源の性也

花鳥の説も其故あるにや 五六の間未分明云々 此外心あり

いつれも面白歟 此時のさまうれしけれとも猶あぢきなく物思ひなるへき心をこめて物からといへるにや云々 感あるにや

聞書にはうれしき物からかるくしきと也

箋聞には五六君未分明事云々

さて箋聞にも青表紙の義退而思ふ時はかるくしきか難なると也 師説云々

私云 うれしき物はかるくしきか正説也 花に五六分明ならぬと弄ノ義二いよく物思ひのますと云は異説也 然ともいつれも面白しと心得へし

箋秘 凡源氏物語の中にも此巻すくれたると也 六百番判にも紫式部は哥よみの程よりも物かく筆は殊勝の上花の宴の巻はことに艶なる物也云々

「うれしき物から」の解釈について、花鳥余情には「いまた六の君とはたしかにしらぬ心をふくませたり」とあるが、秘は「かるくし」と記している。そしてさらに、紹巴抄を示す聞書にも、実枝の聞書で

ある「箋聞」にも「かるくし」と記している。これらの注について「私云」として記されているのは、「うれしき物はかるくしきか正説也」と、説が分かれている解釈について、花鳥余情に「五六分明ならぬ」と記し、弄花抄に「いよく物思ひのます」と記しているのは「異説也」と断定している。その上で「然ともいつれも面白しと心得へし」とあるが、これらの注は、単に諸説の相違を記したのみならず、拠るべき解釈を記しているから、通勝自身の私説とは推定できない。三条西家で伝承された、三条西家の解釈を伝えたものと推定できよう。こうしたことから、岷江入楚の「私」説は、通勝の自説を記した注のみならず、秘、あるいは箋として公に伝承された秘説についての解釈など、実枝から私的に教授された秘説を記した注も含まれていると推定できる。岷江入楚に記された「秘」「箋」が三条西家の公的な解釈であるとする、公的な解釈を補い、補足する解釈を、「私」として実枝から通勝に伝えることもあったと推定できよう。通勝の「私云」は、通勝の自説とは限らず、実枝の自説も含まれる注として検討することが必要であろう。

注

- (1) 「真木柱と真木の柱」(『文化科学研究』26 二〇一五年三月)、「岷江入楚の「私」説——真木柱巻を中心にして」(『中京大学国際教養学部論叢』二〇一六年三月)。
- (2) 源氏物語古注集成。源氏物語提要。解題。
- (3) 岷江入楚の引用は源氏物語古注釈叢刊による。注釈の場所を示すため(一)内に源氏物語古注集成の通し番号を付した。